

混種語に現れる和漢の形態素

白 井 清 子

本報告は拙稿「混種語からみた各時代の造語の諸相」（『学習院女子短期大学紀要28』所収 1990年12月）における混種語の調査をもととしている。資料等調査の詳細についてはそれを参照願いたい。

一、形態素についての調査結果

混種語はその成り立ちからいって一語に必ず二つ以上の語種の異なる形態素が含まれている。ここではその混種語に現れる和語形態素と漢語形態素の間どのような共通点・相違点があるかを奈良・平安・院政・鎌倉・室町前期・室町後期・江戸前期・江戸後期の八つの時代に分けて調べてみる。この調査を通してめざすところは各時代における和語と漢語の特質の把握にある。

まず、各時代にそれぞれの形態素がどれだけあるか調べてみる。その際、或る形態素を含む混種語がその時代にいくつあるかも調べる。例えば平安時代に「殿上」という形態素を含む混種語として「殿上口」「殿上蔵人」「殿上人」「殿上童」「殿上童部」「宮殿上人」「童殿上」の語があるので「殿上」の結合数は7であるということにする。表1は和語形態素、表2は漢語形態素についての結合数別の表である。時代が下ると混種語全体の数が増加しているので形態素の数も増加する。最下欄の平均結合数（混種語の数を形態素の合計で割ったもの）を見てみると表1と表2、即ち和・漢両形態素では鎌倉・室町時代前期でかなりの差がある。この二つの時代の特徴的なことは何かと調べてみると、「～卿」「～公」のように固有名詞を含む語が非常に多いことである。そこで固有名詞を含む混種語を除いた形態素の合計数を他の時代も含めて掲げ、それをもとに算出した平均結合数を示したものが表3である。表3によって和・漢両形態素のそれぞれの平均結合数を見ると、数の極端に少ない奈良時代を除き、他は時代的な差はあるものの同時代における和・漢の差は少ない、平安、院政両時代

表 1 結合数別和語形態素

結合数	奈良	平安	院政	鎌倉	室町前期	室町後期	江戸前期	江戸後期
10以上		7	4	7	5	35	20	17
9				2	2	4	4	5
8		2		2	5	6	6	1
7		3	1	5	2	4	9	11
6		6	7	7	7	16	8	15
5		5	4	8	13	27	23	17
4		11	7	14	22	32	38	28
3		18	15	35	32	72	59	59
2		46	28	64	79	161	121	122
1	6	218	194	380	405	499	436	454
計	6	316	260	524	572	856	724	720
混種語数	6	570	409	891	963	1994	1621	1530
平均結合数	1.00	1.80	1.57	1.70	1.68	2.33	2.24	2.10

表 2 結合数別漢語形態素

結合数	奈良	平安	院政	鎌倉	室町前期	室町後期	江戸前期	江戸後期
10以上		6	2	9	13	32	27	17
9				1	5	7	2	9
8			2	3	3	6	3	10
7		6	1	4	5	9	8	5
6		7	2	6	3	12	10	12
5		4	8	10	10	27	15	20
4		9	1	10	15	34	37	25
3		11	14	31	13	63	58	46
2	2	54	38	57	64	124	112	110
1	2	180	192	262	303	561	458	437
計	4	277	260	393	434	875	730	691
混種語数	6	570	409	891	963	1994	1621	1530
平均結合数	1.50	2.06	1.57	2.27	2.22	2.28	2.22	2.21

表 3 和・漢形態素の比較

		奈良	平安	院政	鎌倉	室町前期	室町後期	江戸前期	江戸後期
形態素 の数	和	3	312	254	419	422	843	695	701
	漢	2	271	245	370	401	859	724	667
結合数 平均	和	1.00	1.83	1.61	2.13	2.28	2.37	2.33	2.18
	漢	1.50	2.10	1.67	2.41	2.40	2.32	2.24	2.29

は和・漢とも他の時代より幾分低い数値になっているが、鎌倉時代以降はほぼ似通った数値を示しており、いずれも2.1~2.4程度である。固有名詞を含む混種語を除いた場合、混種語では和・漢の形態素の数が極端に異なることがないといえる。

次に形態素を語種別に調べるために二つの調査結果を示す。第一は奈良時代を除く各時代において結合数の多いもの10語(表4・表5)。第二は各時代の結合数の多い形態素の上位約15パーセント程度を意味分野や語としての性質によって分類したもの(表6・表7)。なぜ15パーセントかという、各時代の形態素を結合数の多い方から累計してそれで全体の何パーセントを占めるかを調べてみると各時代まちまちの数字を示すが奈良時代を除いていずれの時代も15パーセント前後のところまで線を引くことが可能であること、逆に他の数字で線を引くことが困難なこと、また約15パーセントを占めるのは和・漢両形態素ともに平安~室町前期は結合数3以上、室町後期~江戸後期は結合数4以上のものでありかなり造語力のあるものと認められること、考察の対象として適当な量であることが理由である。意味等の分類はあらかじめ設定したのではなく似た性質を持つものをまとめていった結果自然に出来た分類で、目安として考えるべきものである。(奈良時代は少ないので全部掲げる。)

表4 各時代で結合数の多い和語形態素10語。(結合数の同じものが複数あって10語で切れない場合はそれ以上になっている。語のあとの数字は結合数。表5についても同じ)

平安時代	小(こ) 23	君 15	所 14	大(おほ) 12	一(ひと) 11	異(こと) 10	もの 10	人 8	仏 8	文(ふみ) 7	男(をとこ) 7	女(をんな) 7				
院政時代	異 13	仏 13	~げ 12	小 10	の(助詞) 7	さま 6	所 6	生(なま) 6	わ~ 6	木 5	子 5	大 5	形(かた) 5	人 5	屋 5	女 5
鎌倉時代	小 39	大 19	所 18	~げ 14	の(助詞) 13	聖 10	わ~ 10	方 9	さま 9	奴(め) 8	もの 8					
室町時代前期	小 25	大 16	所 16	方 14	一 10	打ち 9	引き 9	白(しろ) 8	流れ 8	~目 8	屋 8	若 8				
室町時代後期	小 50	屋 34	~さ 29	手 27	立て 25	~目 25	大 24	もの								

24 の(助詞) 21 方19 所19

江戸時代前期 ~目81 小40 屋40 もの33 大20 手19 敷き18 何17
立て16 奴(め) 16

江戸時代後期 奴54 屋49 もの38 ~目37 小31 前17 大16 口16
手16 敷き16

表5 漢語形態素

平安時代 様(やう)42 文字18 絵17 装束12 法師12 尼7 香7 具
7 碁7 殿上7 余7 院7

院政時代 様17 法師11 絵8 卿8 経7 京6 銭(ぜに)6 烏帽子
5 香5 瓦5 高麗(こま)5 装束5 寮5 沙汰5 地(ぢ)5

鎌倉時代 卿65 様60 法師35 地18 絵17 公16 武者13 文字13 御
前11 女房9

室町時代前期 卿62 様32 勢29 合戦28 辺28 地20 公12 法師12
党11 武者11 文字11

室町時代後期 様40 茶35 地33 勢23 絵21 気(き)20 番19 座16
胴16 鉢16

江戸時代前期 貫41 様36 茶28 地26 衆(しゅ・しゅう)25 次第21 刃
(もん)17 座16 絵16 帳15

江戸時代後期 茶41 気39 地29 ~中24 様24 衆23 番17 鉢16 座
14 半12 棒12 文字12 紋12 絵12

二、和語形態素の考察

表4と表6の二つの表をもとに考察していく。

◆和語形態素は意味の上で時代的な特徴が少ない。日本語として基礎的なものがほとんどである。

◆形状・様態、方向、人間や身体を表すものが各時代を通じて多い。動詞は時代が下るにつれて著しく多くなる。室町時代前期以後一番多い分野になり、特に江戸時代前期では表6に掲げた形態素中動詞が40パーセント弱を占めている(108語中43語)。動作や形状・様態は漢語より和語の方が造語しやすいことを示す。(ちなみに同じような傾向が「さわやかマナー」のような現代の混種語にも見られる。)

◆時間、事柄、数・単位の分野はいずれの時代にも比率が低い。和語によって

表6 分野別和語形態素 (数はこの表に掲げた各時代ごとの形態素の数)

項目	人間 身体 動物	場所 方向 空間	時間	物体	事柄	数 単位
奈良 6	を(め) (男)(女)			錦 剣 斧		
平安 52	人 身 童 ぬし 手 君 を(を) な(姿) 腹 を(と) ん(な) が(心) こ(男) こ(女) 顔 仏 (男)(女)	ひがし(東) かた(方) 所 官 司	今 日	文 紙 かさね 箱 (襲) 物	歌	よ(四) ふた(二) ひと(二)
院政 38	人 女 聖 君 子 足 男 仏	所 屋 寺	今	木 紙	歌	ひと
鎌倉 80	人 女 侍 仏 手 姿 君 子 藏 聖 足 男 童 人 心 顔	ば 所 大 田 方 中 (場) 唐 和 舎 う も 熊 屋 へ (下) 野 野 へ 表	今	何 紙 紙 ぐそ 物 絹 (船) かぶと(蓑) 箱 車 (甲)	事	ひと ひとつ
室町前期 88	人 母 佐 手 口 犬 君 侍 々 足 腹 猿 女 山 心 顔 (頭) 伏	鎌 大 熊 屋 中 倉 宮 野 方 前 所 大 野 方 しも 唐 和 西 しも	今	何 車 桶 物 筋 筋 竹 (金) 甲	数	いくさ(軍) ひと ひとつ
室町後期 124	人 子 口 かしら め 侍 腹 足 馬 (女) 手 足 目 鳥 顔	所 所 国 方 内 脇 場 場 津 津 へり 唐 (空) 町 町 しも 山 屋 (縁)	時 月 日 朝	何 柱 葉 酒 酒 酒 酒 物 棚 火 餅 餅 餅 餅 木 箱 水 飯 飯 飯 飯 板 草 壺 湯 湯 湯 湯 貝 弓 袋 車	事 組	いくさ ひと よ
江戸前期 108	人 男 手 毛 親 女 顔 あたま 子 奴 口 (頭) 侍 心 目	所 道 方 脇 場 町 した(した) 前 江 屋 (した) 中 戸 寺 寺	時 日 今 年 月	何 箱 筋 鞍 物 ね ね ね ね 木 (船) (船) (船) (船) 湯 湯 湯 湯 棚 綺 (籤)	浮世 歌	ひと
江戸後期 94	女 口 親 腹 子 声 手	所 上 横 場 方 前 江 伊 内 戸 勢 道	時 朝	何 籠 水 豆 船 物 湯 綿 玉 木 酒 紙 紙 箱 (金) 餅 橋	事 旅 先 歌 節	

形状	動詞	接助詞
	舞ひ	
さま しら 色	青 うす ふる おほ こと なま 合は 打は 染め 作り 通る 参り	の (助詞) すがね しがち さ
さま しら 色 (かた)	異 小生 薄大 有り くし 染め 作り のぼり 取り 付き	の わげ
かた しろ さま	丸 青 黄 薄古 大異 無げ なが あら わか 合は 言ひ 老い 掻き し立 申し 参り 打書 打ち	の たし み くた らう み(御) め(奴) さ
平 (ひら)	しら 長 青 紫 薄若 小幾 古大 合は 合ひ 歌ひ 落ち 懸け 責め 作り 取り 始め 舞ひ 折 引き 向か ひ	の わみ 目 さがた
かた しろ 丸 色	青 黄 薄 荒若 生片 幾(素) す 上入 置き 掛け かづ 切り 好み 敷き 摺り 染め 立て 尽く 付け 取り 巻き 持ち 折 焼 き	の お ま ま 真 御 すがち そ 目
色 しろ 若 小	長大 高幾 若小 合入 打ち 置き 懸け 懸け 替へ 切れ 切り 挿し 立て 使ひ 潰れ 連れ 取り 引き 持ち 焼 き	の 目 わさ 居
さま 赤 しろ 黒	大 うは は 片 から (悪) (悪) 浮 薄 あけ 入り 売り 懸け 替へ 切り 越し 敷き 挿し 違ひ 立 使ひ 潰れ 連れ 取り 引き 持ち 焼 き	の べら べら く ナド く ナド く ナド 目 がた め (奴)

表7

分野別漢語形態素

(数はこの表に掲げた各時代ごとの形態素の数)

項目	人間関係	身体	官職	身分	地名	時間	季節	場所	建物	調度	装束	色彩	
奈良 4	力士				高麗	新羅							
平安 43	御(二)		院女御	王家(わかん) 受領 下衆 少将 女房	高麗(こま)	京三条			殿上座 障子屏風	前栽 几帳 厨子 台具	装束 地(ち) 紋	綾(だん) 地(ち)	
院政 30	師弟子		卿受領	目代	高麗(こま)	京			殿上寮 堂洞院	院瓦座 院座	装束 地	烏帽子 鬘	
鎌倉 74	公御前 御(二) 上手大衆 (だいしゅ)		卿女房 閨白	源氏武者 健児党 下衆博士	京	辺坂東			殿上御所 院堂坊	門曹司座 障子屏風 鉢具台盤	装束 袈裟	紺 烏帽子 水干地 紋	
室町前期 67	公御前 御(二) 兄弟 胴		卿女院	党武者 女房	京	辺八条			御所堂院 寮城門堀	幕鉢櫛 覆鉢櫛 障子	装束 地	紺 鬘紋 烏帽子 具足	
室町後期 127	御御前 馬鹿同士 師衆		上臈女房	奉行公方 大名武者	唐京所	辺(へん) 時分			御所坊堂 牢風呂御座	縁(家の)座 櫓瓦門具 幕道具灯籠 屏風台	障子膳箱 盤棒鉢椀	装束 地	紺 鬘頭巾 烏帽子 具足
江戸時代 102	公御前(こぜ) 御檀那 役者浪人		女房武者	大夫傾城 女房	唐日本京	辺代年 時分正月			座鉢道具 風呂蒲団棒	縁(家の)蒲団 行灯格子幕 門台盆	地紋	朱 巾着 草履 頭巾 緬襦子	
江戸時代 98	公御前 役者芸者		女郎	(馬鹿)同士 弟子旦那 兄弟旦那 拳あま(女)	唐京辺町	代寒			坊鉢座棒 風呂盆	格子道具 箱屏風幕	地紋	朱 頭巾 緬 下駄	

遊藝	仏教	動物植物	食物	数量貨幣	形容	動作	その他
	飢餓						
繪香攤 樂(がく) 文字(だ)	法師經 尼精進	菊紅梅 蘇枹				懸勞 想用意	様余 (やう) 気色(けしき)
繪香 文字基	法師 經菩薩	馱		半錢 (ぜに)		沙汰	様
繪拍香 樂子 文字琵琶	法師僧 尼經會	獅子 馱紅梅	柑子 菊殼 籐	一 三十	新 大	沙汰 乱(らう) 番(らん) 勞	様體 (てい) 勢 気色
繪樂面 狀拍子 文字論能	法師僧 經入道	馱 菊籐	茶	兩半 千 十六	新 當 臆病	合番 戰譜代 沙汰	様勢 中體
繪本拍子 文字(書物) 狀論講	法師僧 經	馬(ば) 籐馱	昆布 茶味 噌砂糖 大根毒	一百 兩十二 錢(せん) (ぜに) 算貫	分(ぶん) 符料 金(せん) 銀貫算	總大 無(む) (ぶ) 當(ぢゆう) 無(む) 別(べつ) 本(本物の)	勢 陣(け) 方(形) 中(次第) 違例 角
繪拍子 文字(書物) 狀帳香	人形 坊主 後生 厄法師	木綿 念仏 天狗	茶味 噌	一 十二 兩半 百	貨判 質(箇) 金(せん) 銀貫算	新 本(本物の) 中(じやう)	内証 流 中 類
繪本拍子 文字(書物) 狀音頭 講	狂言 坊主	馱 木綿	大根 茶味 噌菓子 豆腐毒	一 兩三 半番 三百	分(ぶん) 符料 金(せん) 銀貫算	無垢 本(本物の) 中(じやう) 常(じやう) 新 總	様 風(ふう) 中(次第) 凶

時間、数・単位を表現することは難しいらしい。

◆いくつかの時代に共通のものがかかなりある。八つの時代すべてに共通のものはないが、平安～江戸後期の七つの時代に共通のものは「大(おほ)」「小(こ)」「所」「の(助詞)」、六つの時代に共通のものは「人」「をんな」「手」「もの」「一(ひと)」「打ち」「～さ」、五つの時代に共通のものは「顔」「方」「今」「何」「歌」「さま」「白(しら)」「薄」「長」「若」「取り」である。このほかにもいくつかの時代に共通して現れるものは多く、しかもたいていの形態素は一般的な意味を表すごく基礎的なものである。しいてその時代の特徴的な意味を表すものを搜すと、平安期の「～がね」、院政期の「聖」、鎌倉期の「蔵人」「聖」「かぶと」、室町前期の「山伏」「佐々木」「いくさ」「かぶと」「楯(たて)」、室町後期の「いくさ」、江戸前期の「やつこ」「浮世」、江戸後期の「上方」「～べら」ぐらいである。

◆奈良時代をみると物体がまず現れるのは当然として男か女かという別が現れるのは興味深い。男か女かという別は他の時代にも多く現れている。何かの物事を男か女かと形容することによって区別するのが特徴を捉えやすく容易ということであろうか。

◆形態素の数が多くない古い時代では人間・動物の分野の占める割合はかなり高かったがそれらはだいたい決まった語であるので形態素の数が多くなる新しい時代では非常に比率が低くなる。

三、漢語形態素の考察

表5と表7から和語形態素と同様に考察する。

◆一見して和語形態素の場合と意味分野の立てかたがかかなり違うことがわかる。具体的で限定された意味の形態素が多いためである。

◆意味の上での時代的な差は和語形態素より大きい。平安期には官職・身分や装束の分野のものが多かったが、後世は数量・貨幣や人間に関するもの、形容、その他に属するものが多い。

◆各時代を通じて多いのは建物・調度、装束、学芸・遊びの分野であるが和語形態素ほど著しく数の多い分野はない。

◆場所、季節・時間、色彩の分野は各時代を通じて少ない。

◆その分野に属するものが各時代を通じて多い場合でもそこに含まれる形態素

は異なることがかなりある。建物・調度の類いや学芸・遊びの類いはその例である。また、似た意味を表す複数の形態素があるのも目につく。例、「法師」「僧」「坊主」

◆奈良時代は語数が少ないものの外国の地名が二例もある。他の時期にも地名を表すものは出てくるが他の意味分野より特に多いわけではないの考えるとこれは注目してよい。これは「高麗剣(こまつぎ)」「高麗錦(こまにしき)」「新羅舞(しらぎまひ)」のように使われている。外国の地名を冠することでそれまでであったものと区別している。

◆平安・院政期は漢語形態素の意味分野が比較的限られている。特に多いのは建物・調度、官職・身分、学芸・遊びに関するもので、次いで装束や仏教に関するものが多い。

「懸想」「用意」「労」のように動作を表すものが既に見えているから、こういう語も割合早く使われるものらしい。

◆鎌倉時代になるとさまざまな意味分野に広がるのが新しい傾向である。形容語的な意味や用法を持つ「新」「大」のようなものもこの期になると出てくる。形容語的なものの方が動詞的なものより出現が遅くなっている。

◆古い時代にはそのまま一語として使うことのできる独立性の高い、しかも具体的な意味を現す形態素がほとんどであったのに対し、後世になるほどそのまま一語として使うのではなく他の要素と結合して語となるもの、例えば「者(しゃ)」「人(にん)」「人(じん)」「～貫」「～分」「新」「本(真の)」「無(ぶ)」「無(む)」等の、高い造語力を持つ造語成分としての形態素も多くなった。これらは数量や形容の分野に特に多い。

◆いくつかの時代に共通するものも和語形態素同様かなりある。平安～江戸後期の七つの時代に共通のものは「京」「地(ち)」「絵」「文字」「様」、六つの時代に共通のものは「御(ご)」「座」「法師」、五つの時代に共通のものは「女房」「装束」「鬢」「香」「経」「駄」「半」「番」である。

◆意味の上で和語に対応するものがある。「人(ひと)」に対し「じん」「にん」、「大(おほ)」に対し「だい」、「真(ま)」に対し「本」、「辺り」に対し「へん」など。時代が下ると漢語が身近になって和語と同じぐらいの造語力を持っているものがある証拠である。

漢語形態素を漢字の字数について調べてみると、表7に掲げた分、すなわち

結合数の多い形態素の場合と、結合数の少ないものも含めたすべての漢語形態素の場合とでは状況が異なる。そこで表7に掲げた分（結合数の多い形態素）の漢字の字数について調べたものを表8に、結合数の少ないものも含めたすべての漢語形態素の漢字の字数について調べたものを表9に掲げる。二つの表から次のようなことが読み取れる。

表8 表7をもとにした字数別漢語形態素 下段（ ）内はパーセント

	奈良	平安	院政	鎌倉	室町前	室町後	江戸前	江戸後
1字		20 (46.5)	18 (60.0)	41 (55.4)	45 (67.2)	88 (69.3)	60 (58.8)	60 (61.2)
2字	4 (100.0)	23 (53.5)	11 (36.7)	32 (43.2)	21 (31.3)	38 (29.9)	42 (41.2)	37 (37.8)
3字以上			1 (3.3)	1 (1.4)	1 (1.5)	1 (0.8)		1 (1.0)
合計	4	43	30	74	67	127	102	98

表9 全体をもとにした字数別漢語形態素 下段（ ）はパーセント

	奈良	平安	院政	鎌倉	室町前	室町後	江戸前	江戸後
1字		99 (35.7)	99 (36.8)	136 (34.6)	141 (32.5)	343 (39.2)	232 (31.8)	229 (33.1)
2字	4 (100.0)	162 (58.5)	159 (59.1)	242 (61.6)	259 (59.7)	506 (57.8)	450 (61.6)	428 (61.9)
3字以上		16 (5.8)	11 (4.1)	15 (3.8)	34 (7.8)	26 (3.0)	48 (6.6)	34 (4.9)
合計	4	277	269	393	434	875	730	691

- ◆すべての漢語形態素におけるよりも、結合数の多い形態素に限定したグループの方が漢字一字の率が高い。
- ◆結合数の多い漢語形態素では漢字一字のものは平安時代以降かなりの高率を占め、一番低い率でも平安時代の46パーセント、一番高い率の室町時代後期では69パーセントにも及ぶ。結合数上位語では時代が下るにつれ一字の比率が高くなる傾向がある。
- ◆全漢語形態素では平安～江戸後期のすべての時代において漢字一字の比率は30パーセント代であり、その比率はほぼ一定しているといつてよい。
- ◆漢語形態素の絶対的な量が増える室町時代後期から江戸時代後期にかけても、表9の示すように漢字一字の比率が下がっていないことは、漢字一字の絶対的な量そのものが増えていることにほかならない。その漢字一字の形態素には結

合数の多いものが多く、同時に非独立型のものが多い。従って、そのことは混種語だけでなく広く和製の漢語に関しても造語しやすくなっていることが推測される。

その他室町時代後期から「気(き)」が江戸時代前期から「性(しゃう)」が出てきて、人間の内面のとらえ方に変化が見られること、「～のような」の意味を表す接尾辞的な漢語形態素が「～様」「～体」「～式」「～流」「～風」と変化していること等、細かく検討すれば興味深いことが多々あるが今は紙数の余裕がないので和・漢両形態素の大きな特徴を指摘するにとどめておく。